JISSEN

龍谷大学 大学院
実践真宗学研究科 情報誌 ジッセン
NO. 2
Ryukoku Graduate School of Practical Shin Buddhist Studies
2012.02.01.WED
Free Magazine "JISSEN"

実践真宗学研究科の活動が見えるマガジン
親鸞聖人 750 回大遠忌・東日本大震災　特集

龍谷大学マスコットキャラクター
ロンくん

¥0 ご自由にお持ち下さい

JISSEN

情報誌 JISSEN【ジッセン】
2012年2月1日（水）発行

発行元：龍谷大学 大学院 実践真宗学研究科 出版部会
所在地：〒600-8268 京都府京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1 清風館 3F 実践真宗学合同研究室内
☎：075(366)0621（実践真宗学合同研究室）

龍谷大学大学院実践真宗学研究科は、龍谷大学で学ぶ仏教、特に浄土真宗を社会の中で実践することを目的としています。修士課程では珍しい三年制もさることながら、院生総勢 90 名弱と人数も豊富な大学院です。二年次からは宗教実践活動分野と社会実践活動分野に分かれ、完全オーダーメイドの研究や実習を行っています。教員の方々とじっくりと話し合え、納得のいく実習プランが設定できるのも魅力の一つです。宗教を通して様々な角度から、人が抱える悩み、社会が抱える問題に取り組んでいる研究科です。

また、この情報誌『JISSEN』は現代の抱える諸問題に対する本研究科の取り組みと院生の思いを、学内外の方々に少しでも知っていただく事を目的として、院生が主体となって発行するものです。

実践真宗学研究科のブログも公開しています。
→ blog：http://ryukokugps.blog130.fc2.com/
→ twitter：http://twitter.com/#!/ryukoku_gps

御門主様による親鸞聖人七百五十回大遠忌についての御消息

親鸞聖人像「熊皮御影」
奈良国立博物館蔵所蔵

今年は親鸞聖人の七百五十回大遠忌の年である。ということは親鸞聖人が往生されてから七百五十年経過したということである。七百五十年という時間は、ちょっと考えられないくらい長い時間である。この長い時間を越えて真宗の教えが伝えられているということの有難さはどれほどのものであろうか、量り知ることが出来ない。

親鸞聖人は自身に関することをあまり書き遺しておられないため、どのような生涯をおくられたか詳細に知ることは出来ない。おおまかに記せば、承安三年に生まれ、末法思想が蔓延する養和元年に出家得度、二十年にわたる修行の後、比叡山を下り、法然聖人に教えを受け、そして浄土の真宗として教えを明らかにされた。

親鸞聖人の教えは一切凡夫、悪人正機、絶対他力などに代表されるが、それらは阿弥陀仏の救いに身をまかせるというところに集約されるであろう。煩悩具足の凡夫たる私という自覚は、救いを求めるものに厳然と立ちはだかるものである。しかしそのようなどうしようもない私を救わんがための如来の慈悲であり、南無阿弥陀仏である。

七百五十年の時を経て聖人の教えを受けることの出来るこの身と、南無阿弥陀仏の不思議を有難く思う。

M1 加藤 智海

写真提供：１札幌市横湯氏２宗教法人浄土真宗本願寺派

1大遠忌中の御影堂正面。左右には季節のお供物が荘厳され、音楽法要で美しい旋律をそえる。2阿弥陀堂に向かい、縁儀する出勤者の様子。中央はM2山本、緊張の面持ち。3大遠忌法要中に西本願寺内で集合写真をとる実践真宗学研究科の院生たち。4本願寺前の門前町は「ご縁まち」と称し、様々な催しが行われ、団体参拝などの人々で賑やかな雰囲気であった。

写真提供：宗教法人浄土真宗本願寺派

私たちの親鸞聖人７５０回大遠忌法要

親鸞聖人750回大遠忌 Shinran Shonin's 750th Memorial ©Hongwanji

平成二十四年一月十六日は宗祖親鸞聖人の七五〇回大遠忌に当たり、我々のご本山の西本願寺ではそれに向けて二十三年四月から、二十四年一月の御正当報恩講まで、七・八月と十二月を除き九日から十六日にかけて「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」が勤修されました。また、それに伴い五月には「幼児を対象とした法要行事」、七月には「少年を対象とした法要行事」、八月には「青年を対象とした法要行事」も勤修され、幅広く数多くの皆様と共に五十年に一度の御勝縁に出遇える喜びをわかちあえる行事が行われてきました。

私たち龍谷大学実践真宗学研究科では、有志の学生が大遠忌法要に出勤させていただきました。五十年に一度の法要に内陣を荘厳する僧侶の一人として参加することは、大変感動的な経験でした。

出勤の当日、控え室にて衣体に着替えます。そして、本願寺の職員の方からどのようなおつとめをするかという説明を受けた後、阿弥陀堂から御影堂に向かって「縁儀」という列を作って移動していきます。御影堂の南北に大きな太鼓が対になっておかれています。雅楽が鳴り響く中、それが「ドォーン、ドォーン」と共鳴するかのよう鳴らされると、私たち僧侶は、左右左右（さうさう）と約三歩ずつゆっくりと御影堂の中を歩いて行きます。「ドォーン、ドォーン」左右左右「ドォーン、ドォーン」左右左右。そうやって歩くその一歩一歩にこの五十年に一度の御勝縁に僧侶として参加できることの喜びを感じました。おかげさまで私は院生という立場ですので、御正当である一月九日から十六日の十四座も出勤させて頂き、皆勤賞を頂くことができました。出勤した中でも、特に「宗祖讃仰作法（音楽法要）」は美しいオルガンや雅楽の旋律であり、声明（おつとめの旋律）が合わさるとても感動的なおつとめでした。研究科の中でも昨年から練習を重ねていたのですが、御影堂の中で数十人の僧侶、そして何百人・何千人のご門徒の方々と共におつとめするこの法要というのはまさに鳥肌が立つような感動でした。

最後にご門主様が「この身は、いまはとしきわまりてそうらへば、さだめてさきだちて往生し候わんずれば、浄土にてかならずかならず、まちまいらせ候べし」と親鸞聖人の御消息（お手紙）を拝読されるのですが。この御消息を拝聴している時、七百五十年たった今も親鸞聖人が私に語りかけて下さっているような気がしました。こうして、一生に一度あるかないかという御勝縁に、龍谷大学の学生として出遇えたことは、私にとってとても大きな財産となりました。この経験・感動を今後の私の僧侶としての生き方に活かしていけるように噛みしめていきたいと思います。

M2 小林賢五

Copyright © Hongwanji 2006 All rights reserved ※ポスターデザイン文字「安穏」と「ロゴマーク」は宗教法人浄土真宗本願寺派の商標登録です。

煩悩にまなこさへられて
　　摂取の光明みざれども
　　大悲ものうきことなくて
　　つねにわが身をてらすなり

これは親鸞聖人が書かれた『高僧和讃』の一つです。

「煩悩」という言葉に、どのようなイメージを持たれますか。
あまり良いイメージは持たれないのではないかと思います。
私たちは、物や人の外側を見ることはできますが、その内側まで見通すことはできません。
それなのに、自分の勝手な価値観で判断をしてしまいます。
勝手な価値観とは、自分の思い込みのことです。
まさに自己中心の“こころ”のことであり、その“こころ”を「煩悩」といいます。

けれど、私たちはその「煩悩」を通してでしか物や人を見ることしかできません。
つまりそれは何が真実かわからないのです。
「煩悩にまなこさえられて」とは、自らを省みることもなく、真実を見抜く力もないこの私の姿のことです。
私たちの持つ自己中心のこころが、ありのままをみることを妨げていることに気付かせてくださるのが
阿弥陀さまのはたらきであると、親鸞聖人はお示しくださいました。

私が以前、お寺の子ども会のお手伝いをさせていただいていたときのことです。
子どもたちと遊んでいますと、外が暗くなってきたので、そろそろ子ども会を終わりにすることにし、私は

「じゃあ、今日はお終い。みんな気をつけて帰るんよ。」と言葉をかけました。
「ありがとう、先生こそ気をつけて帰ってね。」

私はとても驚きました。
私は子どもたちを心配して言ったつもりだったのですが、子どもたちのほうは私のことを心配してくれていました。
私は知らない間にこどもたちに思われていたのです。
「先生こそ」という言葉を聞くまで、私はそのことに気が付きませんでした。
私たちは物事を自分の都合のよいほうにと考えてしまうことがあります。
しかし、実際はお互いが支えられて生かされているのです。

見えないところで子どもたちは私を心配し、子どもたちに支えられていたことを、気づかされました。
私は当然のように子どもたちを心配する立場にあると思っていたのですが、
私が思ってもいないところで、子どもたちは私のことをきにかけてくれていました。

親鸞聖人はこの御和讃で、
「私たちは真実の自分の姿すら見ることができず、阿弥陀さまのはたらきにも気づけないけれど、
　　阿弥陀様の慈悲は休むことなく私たちを照らし、そのまま見守ってくださっている」とお示しくださっています。

しかし、阿弥陀さまがはたらきかけてくださっていることもわからず、気づかない私がここにいました。
はたらきかけて下さっていることも知らずにいる私の姿を、子どもたちを通して知らされました。

私が寝ているときも　　ご飯をたべているときも　　悩み苦しんでいるときも、
どんなときも間違いなく私にはたらきかけてくださっていたのです。それが阿弥陀さまでした。

藤雄 好華
実践真宗学研究科２年次生
研究テーマ「地域コミュニティーにおける寺院活動の積極的活動」

仲長萌恵
仏教からの差別解放運動

わたしは実践真宗学研究科にて「仏教と差別」をテーマに真宗教団における同朋運動と現代インド仏教復興運動を切り口として考察している。どちらも現実の差別から出発し、仏教の根源的にもつ平等精神と仏教の普遍性を具現化し社会で実践していこうとしている運動である。浄土真宗は、かつて多くの被差別部落民衆の拠り処となった。しかし、その信仰を踏みにじる形で教団には差別が温存されていたのである。今日至っても、差別事件は起こっている。同朋運動は、教団人全体の取り組みであるにもかかわらず未だに一部の人たちによる運動と認識されているのが現状である。一方、近代インドにおいて、人間差別のない仏教に改宗することで不可触民差別からの解放を目指す運動が、アンベードカル博士によって展開された。

わたしは実際に、インドに赴き、この運動が展開されて16年ほどのケララ州とタミルナードゥ州において仏教徒の人々にアンケートを行った。仏教徒となって変化した事として、多くの人々が「人間としての尊厳や自信を持つことができた」と語ってくれた。

そこには、仏教が本来持つ人間平等・人間尊重が生きていた。人々の苦悩に寄り添って展開しているこの運動は、日本の仏教に反省と共に今後の新たな社会的可能性を与えてくれる。わたしは日本とインドの仏教徒が共に連帯し、差別のない世界を願うこの取り組みの担い手の一人となりたいと思うのである。

M３ 仲尾 萌恵

個人研究・実習紹介
JISSEN
２名を Pick Up !!

院生の「研究」って、なんの研究するの？

研究科３年生の実習は どんな事やっているの？

禿川尊法
刑務所見学と教誨の取材

奈良駅からバスに乗り小高い丘の上を目指す。緩やかな坂を登るとレンガ作りのレトロな建築物が見えてくる。一見、歴史を感じるこの建築物は、なんと刑務所なのである。奈良少年刑務所は、明治期に建てられた全国に八箇所ある少年刑務所のひとつである。

私は「真宗における教誨」をテーマに研究をしている。以前、裁判の傍聴に行ったときにこの職に出会い、それから興味を持つようになった。今回は奈良少年刑務所を訪れたときのことを、私の研究の実習紹介として、紹介したいと思う。

入り口は携行品チェックもなく、意外とすんなり入れる。警備が薄い印象を受けるが、ここは刑務所で働く職員の「庁舎」スペースである。そこを抜けて受刑者が入っている「居住区」に入る。中に入ると、塀の外とは明らかに空気が違う。両側にドアノブのない扉、鉄格子のついた窓、４メートルはある高い堀、全てが日常にはないものである。

中では事前にお願いしていた教誨の見学の準備がされていた。教誨の希望者は約十名。読経と法話を聞く受刑者たちは真剣な眼差しであった。

全てを見学した後、外に出ると、刑務所内の様な張りつめた空気はない。受刑者たちは、このゲートをくぐる日を一つの目標として更生の毎日を送っている。犯した罪に苦しみ、宗教に助けを求める現場を見る事が出来たのは貴重な経験であると同時に、自己を見つめなおす良いきっかけになったように思う。

M３ 禿川 尊法

2011.3.11 東日本大震災

震災

から7ヶ月が過ぎた町に私は再び立っていた。何もなくなってしまった町の中にひっそりと咲くコスモスの花が、ただ季節がめぐったことを告げていた。あの日から何が変わったのだろうか。私たちは何をして、今日この日まで生きてきただろうか。

あの日、テレビから流れる信じがたい映像にただ息を呑むばかりだった。それから初めて被災した町を訪れたのは、まだ雪の降る3月下旬のことだった。瓦礫をかき分けて通された道路をやっとの思いで進んだ。町に入るための橋は何本も崩落していた。全国から駆けつけた自衛隊や警察によって必死の遺体捜索が行われ、生活支援物資を届けるための道路の復旧と、避難所や自宅に取り残された人たちに対する生きるための緊急支援が続けられていた。瓦礫と化した故郷をただ呆然と見つめる人、ガソリンの入手が極めて困難な状況の中で身内の安否がわからず探し回る人、家族を亡くし流された家の前で顔を伏せてただ泣き続ける人……。

もう言葉にはならなかった。

しかし、津波は人々の心までもは流さなかった。家や家族を失った多くの人たちが互いに支え合い、譲り合い、励まし合って生きていた。避難所の共同生活のなかで人々はより強く絆を深めていた。人を思いやる東北の風土が、それをより確かなものにしていった。

そして全国から駆けつけ、日夜、身を削るほどに奔走し、決死の救助活動に当たった自衛隊や消防隊、警官たち。その姿にもう頭はあがらない。また、どれだけ多くのボランティアが現地へ足を運んだだろうか。殊に、神戸や新潟で震災を経験した多くの人たちが東北へ駆けつけ、苦しむ人たちの支えになってくれた。言葉では言えない現実を直に味わった人たちは、それだけ同じ気持ちになって寄り添うことができるのだ。困難を乗り越えることによって、人はやさしさを含んだ強さを身につけていけるのだ。

この半年の間に町に散乱していた瓦礫の多くは片付けられ、集積場所に集められた。「復興」という言葉がしきりに叫ばれる中で、悲しみに沈んだ人たちはその谷間に取り残されている。決して簡単に悲しみがなくなることはない。家族や頼るべき人も、家も、全てを失ったなかで、自分は何をどう復興すればいいのか。その「復興」という言葉から取り残されている人たちがいることを忘れないでほしい。

また、津波によって工場や船が破壊され、多くの人が職を失った。失業に伴って職場の寮を出ざるを得ない人たちは行き場所を失い、避難所にも行けない人たちは野宿生活を余儀なくされた。震災によって仙台市周辺では、これまでにない形で新たな野宿者が生まれた。また、避難所の閉鎖と生活物資の供給停止により、自立生活を営むことが困難な人が増え続けた。

今回の大震災は私たちに多くの問いを投げかけ、今までの生活の中にあった問題点を露呈させるきっかけとなった。殊に福島第一原子力発電所の事故は、私たちのエネルギーの主力源である原子力の是非を全世界に問い、我々の生き方を根底から考え直すものになった。一瞬ですべてを奪った津波の猛威は、日頃の私たちの価値観をも大きく変えた。それは生き方や生活スタイルだけでなく、いのちの根本を問うものとなった。しかし、それらの問題は震災によって新しく生まれたものではなく、人間が生きる中で潜在し続けてきた根源的な問題に他ならない。

これまで災害救援活動には様々な宗教者が携わってきた。それらの活動はもはや宗教の壁を超えていた。むしろ最初から宗教という枠などなかったのだ。多くの宗教者たちを突き動かしたのは、そこに苦があったからに他ならない。苦しみがあるならば、その場所に自然に足が向き、その苦に向かって何とかしようという原理が働くからだ。出発点はただその一点でしかない。瓦礫を運び、泥まみれになりながら泥出しをして、ともに汗を流して時間をかけて語り合うなかで自然にそこから「宗教」が滲み出ていく。言葉で語らなくとも、行動のうちにそれは潜在しているのだ。私自身が多くの宗教者とともに活動し、その姿を見ていくなかで、強くそのことを実感した。

3月以降、これまで6回にわたるボランティアのなかで多くの人たちと出会い、様々な支援の姿を目の当たりにしてきた。自らが被災しながら、訪れた私たちを助け、支えになってくださった方たちがいた。支援に行った自分たちがむしろ支えられ、勇気づけられていた。そうした出会いのなかで、生きるための力をどれだけ得たか計り知れない。自分たちがするよりもはるかに多くのものを受けた。ボランティアとして誰かの役に立てたなどとは思わない。むしろ、多くのことを自分自身が学ばせていただく、そのことにボランティアの意味があるのではないだろうか。

M3 岩田　彰亮

震災の足音

大震災が発生した平成23年3月11日から随分月日が流れた。しかし、この災害に関連して発生した原発事故によって生じた放射能汚染やその風評被害を含めた関連被害や不安はなお継続している。避難所の閉鎖も実行された。避難所にいた全ての人の生活の目処が立ったからというわけではなく、いつまでも非常時の状態にしておけないから閉鎖するのであろう。仮設住宅にも入れず、他の地域に行くこともできない人は公民館等に一時避難的に移住する人もいる。

このような状況の中、私たちは被災後数回に渡り被災地を訪れて幾ばくかの被災地支援を行った。当初の所感としては「災害発生当時、テレビを見ると涙が溢れた。道路を走る車を津波が飲み込もうとする場面が何度も報道された。これは本当に起きていることなのか、現実として信じられなかった。」それでも被災地に出向いたのは同じ日本の中で、行くことができる距離で、苦しみ、困っている人がたくさんいる。その人々のために何かしたい、しなければという感情が湧いてきたからである。

実際に被災地に行って感じたのは、被災された方々の苦しみの多さ、複雑さだった。苦しみと一言で言っても、本当に言葉で表現できないような、とても複雑なものだった。まだまだ被災地には多くの問題が残っている。私たちは今後も、私たちに出来ることを考え、出来る限りの支援をしていきたいと考えている。

M3 川端　勝　M1 西池 深音

度重なる自然災害

那智勝浦町では台風12号の記録的豪雨により山は崩れ、川は崩壊、大きな岩石や、木材などが、山津波となって町を飲み込んだ。それはまるで三月に起きた東日本大震災の様だった。災害から二ヶ月後、私が現地へ向かおうとすると、大阪から那智勝浦町までの電車は日に往復一本しかなく、それ以降の駅は通行止めとなっていた。車で移動中、窓から崩落した橋に、大きな穴が開いた家、また山津波に流された車などが目に入った。粉塵や泥の臭いに、カビが生えたような独特な臭いが混ざり合い、強烈な臭いと共に記憶に焼き付いている。被害が大きかった井関地区は、まるで遠い世界にいるかのような錯覚を起こすほどの光景だった。毎年多くの人が観光に訪れる那智の海岸や滝の周辺は、流木や家財が打ち上げられ、見るも無惨な姿になっていた。

私が参加したボランティア活動では、山津波で運ばれた泥を床下から運び出す作業が中心だった。一ヶ月経っても家の中の泥出しが完了していないのがその時の現状だった。一人暮らしが多い事や、交通の便の悪さからボランティアの人数が不足し、作業が進まない。そのよう中でささやかではあるが、活動を行った。

今回の災害は私達にとっても無関係ではない。私達は自然の犠牲と共に発展を遂げてきた歴史がある。私達は今一度、何が大切であるのか、一人一人が真剣に考え、それぞれが自分に出来る活動というものを探し、行動して欲しい。

M2 巽　一仁

深草学舎開設・経済学部創設５０周年記念祝賀会 雅楽演奏でお祝い!!

雅楽とは、世界最古のオーケストラです。そして、宮中や寺社などにおいて伝わる日本古来の音楽や舞です。今回は龍笛・篳篥・笙の三管で演奏をさせていただきました。

十一月六日、龍谷大学深草学舎と経営学部の設立五〇周年記念の祝賀会に雅楽の音色が響きわたった。

実践真宗学研究科の院生による雅楽の演奏である。当日は篳篥三人、龍笛三人、笙二人での演奏。曲目は五常楽と越天楽という二曲の演奏と雅楽の解説が行なわれた。一年ほど前から少しずつ練習を始め、夏に合宿を行い、梅小路公園での練習は重ねていたが、人前での演奏はやはり緊張する。演奏終了後には額に汗を流す程だった。演奏を終えた後、「雅楽を初めて聞いた。すごく感動しました。」といって声を掛けてくださり、激励をいただいた。在学中に更に研鑽を積み、今後の活動にも繋げられるよう、士気高まる演奏会であった。

M2 藤井一葉

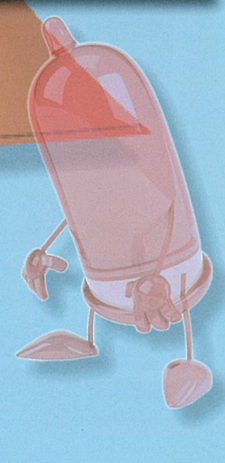
AIDS 文化フォーラム in 京都

1994年にアジアで初めて国際エイズ会議が開かれた際は、金額・内容共に一般人には参加し難いものだった。そこでもっと広く一般の人にも参加してほしいという意味と、日常的な側面を、という意味で“文化”の文字を冠し、「AIDS 文化フォーラム」として横浜でスタートした。

横浜で開催されていたエイズ文化フォーラムが関西で初の開催。最初の会議から本研究科の院生が関わっていた経緯もあって、龍谷大学大宮学舎にて開催されることとなった。同会は関西のエイズ関係の諸団体がそれぞれブースを持ち、発表や展示、シンポジウムなどを行う。実践からも「宗教とエイズ」という形で登壇した。専門医の岩室氏やキリスト教の方を交じえ、それぞれの宗教団体での活動や、問題点など話は多岐に渡った。

最後の質疑応答でも多くの質問が上がり、宗教者のエイズへの姿勢を示せたように思う。

M2 成澤一行



葬儀の今を考える

公開シンポジウム 葬儀の今を考える

十月十三日木曜日、龍谷大学大学院実践真宗学研究科公開シンポジウム「葬儀の今を考える～あなたはどう見送り、どう見送られますか～」が開催された。

昨年度は「現代の医療と宗教、仏教」と題した公開シンポジウムを行い、今回のシンポジウムは実践真宗学研究科として二度目の公開シンポジウムとなる。昨年度のシンポジウムでは、企画から運営までほぼ全て先生方が行ったが、今年度は、深川教授のバックアップの下、企画・運営の一部を院生が担った。具体的には、パネリストの選定や構成内容の企画、シンポジウム題名の決定、パンフレットの表紙デザインや当日スタッフを院生で行った。

今回のようなシンポジウムの企画運営などは院生側も始めての事であり、パネリストとの交渉や予算組みなどは先生や職員の方のサポート無しにはできなかった。また、全体としても、スタッフ間の情報共有の不足等が大きな課題が残った。結果としては、多くの方にご来場頂いた上、それぞれパネリストの方々からとても興味深いお話があり、院生との対談、会場からの質疑応答においても非常に深い議論ができた。今回のシンポジウムでは、『死』そのものがタブー視される現代において、核家族化した都市部における葬儀の潜在的な需要を認識し、そこにどのようにして宗教者がアプローチするかが今後二十年で非常に重要な課題であるという事がさらに明確化された。

このような公開シンポジウムは、実践真宗学の活動を社会に発信できる重要な機会である。今回のノウハウを活かして、次年度以降には企画、運営全てを院生の手で開催できるようにするための、一つのベースとしてのシンポジウムであった。

M2 三ケ本義唯

パネリスト

本願寺派布教使　龍谷大学教授　清岡隆文

宗教法人神宮寺住職　龍谷大学客員教授　高橋卓志

イオンリテール㈱　イオンライフ事業部長　広原章隆

Do it yourself !!

藪内流茶道体験

藪内流とは、藪内剣仲を流祖とする古儀茶道である。天下人秀吉の時代に改正統一された茶の湯の世界の流れは、一つは利休を祖とする千家で、この千家は京都上京に住するため上流と呼ばれ、剣仲の茶の湯を受け継ぐ藪内家は下京にあるため一般に下流と呼ばれている。「武家点前」や「男点前」と云われるように、千家などと比べて所作が大振りとなっているのが特徴。

十月五日（水）、下京区西洞院通正面にある茶道藪内流御家元にて茶道体験が行われた。

西洞院通に面した武家屋敷風の表門をくぐると、そこには先程まで外で感じていた喧騒さが嘘のように違う世界が広がっている。玄関を上がり、緝熙堂（しゅうきどう）へと通された。「本願寺と藪内家の歴史」と題して、藪内紹由若宗匠（やぶのうちじょうゆう わかそうしょう）より、緝熙堂とは本願寺第十八代法如上人の居間であった書院を茶室仕様に変えて移築されたものである、ということなど色々お話を頂いた。その後は茶席での客の作法を学ぶ班とお庭拝見の二班に分かれ、後ほど交代。それぞれ有意義な時間を過ごした。

藪内流は、本願寺第十三代良如上人へ茶菓を献じて以来、今日に至るまで、正月七日にはご門主へ献茶が続いているのである。皆さんも是非一度、茶道を体験してみて下さい。

M2 阪口一吾

初級Level

①浄土真宗の本尊は？

中級Level

②親鸞聖人の師匠は？

③『教行信証』・『歎異抄』・『唯信鈔文意』、親鸞聖人の著作でないものは？

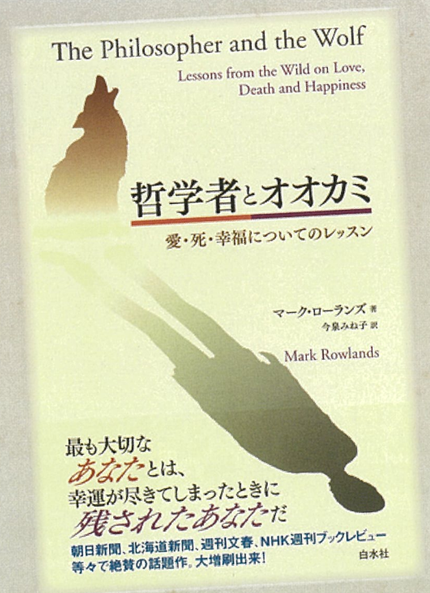
上級Level

④親鸞聖人の父親は日野有範ですが、現在その廟はどこでしょうか？

⑤親鸞聖人の直筆で唯一「綽空」と書かれている書物は何でしょう？

おたく

⑥承元の法難の際の様子が拾遺古徳伝に描かれているが、そこで斬首されている四名の名を挙げよ。



『哲学者とオオカミ
愛・死・幸福についてのレッスン』
マーク・ローランズ 著　今泉みね子 訳
白水社 2010年
¥2400（税別）

この本は、マーク・ローランズ（オックスフォード大学で博士号取得後、マイアミ大学で教鞭を執る気鋭の哲学者）とオオカミ犬ブレニンの10年間にわたる兄弟のように過ごした共同生活の記録である。著者は、勇敢で、賢く、悪戯者のブレニンとの共同生活を通じて自身（人間）と彼（オオカミ）を比較し、『人間』とはどのような生き物なのかを哲学的に考察していく。

『なぜわたしがブレニンをこうも愛したのか、そしてブレニンが逝ってしまった後、なぜ彼のことがこれほど恋しいのか、長い間わからなかった。それが今、ついに理解できたように思う。ブレニンはわたしに、それまでの長期間の教育で学ぶことができなかった何かを教えてくれたのだ。』（本書16頁）

一人と一頭の穏やかな日常風景、ブレニンの日々のイタズラ、ちょっとしたトラブル、そして最期の別れと慟哭など様々なエピソードが細やかに記されており、哲学に興味のない人間でも深い共感を持って読み進めることができる。オススメの一冊。

M1 大塚 雄介

親鸞力検定の答え①阿弥陀如来(仏)②法然聖人③『歎異抄』④三宝寺⑤七条制戒⑥西意善綽・性願・仏蓮・安楽

コラム

「酒を飲むのは喉が渇いたからではない。心が渇いたからである。」

「断酒会活動におけるスピリチュアリティ」という研究の実習として、断酒会への入会を通じて例会活動に参加した。例会では、アルコール依存症者同士が、壮絶な酒害体験談をひたすら語り聞き合う。会員は「一日断酒」、「例会出席」を継続することによって「酒を飲むのは喉が渇いたからではない。心が渇いたからである。」という現実に気づかされる。飲酒欲求と断酒意欲との激しい葛藤の末、内省的自覚から「断酒新生」に至ることができるとされる。それは、まさに酒を飲む人生に生きる意味を求めるのではなく、酒を飲まない人生に新たな意味を見出す創造的な営みである。断酒会は、禁酒とは異なり、社会に酒があることを容認しながら、自らの飲酒を否定する組織である。その活動は、酒害者をつくらないための社会づくりにも貢献している。

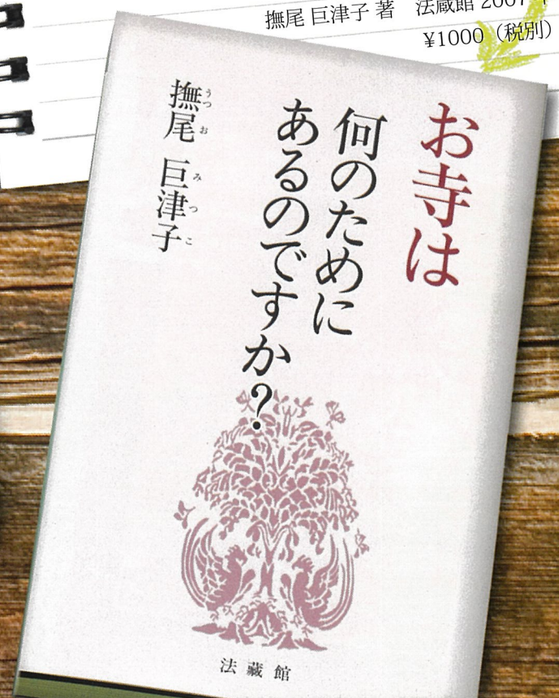
M3 丸田 和大

新種の文具を発見！！"Line"

HARACのhandy paper cutterその名も"Line"である！一見はパソコンのマウスのようだが、なんとペーパーカッターなのだ。出版部会お気に入りゲッツ。日常マウスを使う事が多くなった現代では、こんな形をしたカッターの方が使いやすいのかもしれない！？HARAC『Line』¥1500（税別）

「人生を豊かにする仏教の教えを多くの人に」

創業４００年の老舗出版社「法蔵館」様にお話しを聞く機会をいただきました。きっかけは京都新聞（２０１１年１０月１６日朝刊）の記事です。「専門的な知識を書くと、一般読者は理解しにくい。堅いと思われがちな仏教を分かりやすく『翻訳』したい」との記事内容にとても共感しました。とかく浄土真宗の法話は難しい真宗用語になりがちです。もちろん教学は大切です。そのうえでわかっていただくための表現のくふうが欠かせないと改めて気づかされました。また僧侶に対して①儀式作法・お経などはプロとして凛としてほしい②寺にとどまらずどんどん外に出て行ってほしいとのメッセージをいただきました。なお推薦書籍として「お寺は何のためにあるのですか？」をご紹介いただきました。在家からお寺に嫁がれた坊守さんの素直な文章が印象的です。勉強会などのテキストにも最適ですのでぜひご一読ください。

M2 佐々木 大介

『お寺は何のためにあるのですか？』
撫尾 巨津子 著　法蔵館 2007年
¥1000（税別）